

下
の
原
A
遺
跡

しも はら
下 の 原 A 遺 跡

二〇二一年三月
長野県飯田市教育委員会

2021年3月

長野県飯田市教育委員会

しも はら

下の原 A 遺跡

2021年3月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は美しく豊かな自然に恵まれ、古くから多くの先人たちの足跡が市内各所に刻まれ、伝統文化と厚い人情味にあふれたまちです。平成29年度からスタートした飯田市の総合計画、いいだ未来デザイン2028は、リニア中央新幹線開通の翌年にあたる2028年にみんなで実現したい「くらしの姿」「まちの姿」をビジョンとして掲げ、その実現に向けて多様な主体がそれぞれの立場で「飯田の未来づくり」にチャレンジするための指針として策定しました。その基本目標4、およびいいだ未来デザイン2028の分野別計画である第2次飯田市教育振興基本計画の前期4年 の重点目標は、多様で独自で奥深い伊那谷の自然・歴史・文化を人づくり・地域づくりに活かしながら、世界につながる価値の創発に取り組むものです。

下の原A遺跡が所在する伊賀良地区は、古代東山道の育良駅家推定地があり、平安時代には高燥な台地上の開発が進み、伊賀良庄として莊園が置かれました。鎌倉時代には北条氏の一族、そして信濃国守護職小笠原氏が勢力伸長の基盤とした、重要な役割を果たした地域です。また、江戸時代には佐竹達平や鈴木芙蓉といった画家を輩出した地域でもあります。古来豊かな歴史・文化を育んできた地といえます。

一方、多くの地方都市にみられるように、飯田市でも近年主要幹線道路の整備とともに市街地が拡大し、店舗・事業所が郊外に移転するなど、中心市街地の空洞化が深刻な問題となっています。伊賀良地区は中央自動車道飯田インターチェンジが供用されてからこうした市街地化の波に早くから呑み込まれた地域の一つで、宅地化が著しく進行する一方、調査地点周辺は事業所が進出しており、人口も市内最大となっています。今回の開発もこうした時流に沿ったものであります。

しかし、一方で事業計画地は、埋蔵文化財包蔵地下の原A遺跡の一画です。下の原A遺跡は、昭和62年度に工場建設に先立ち発掘調査が実施され、縄文時代中期・弥生時代後期のムラのあとが見つかっています。今回の発掘調査では、掘られた時代がはっきりしませんが大規模な溝跡が調査されました。天竜川の支流、飯田松川を水源に古代から順次延伸されてきた灌漑水路である伊賀良井（大井川）や、室町時代に一時信濃国守護職を務めた鈴岡小笠原氏が本拠とした長野県史跡鈴岡城跡との関連が窺われるとのことです。地域の歴史に新たな知見が加わったことに、新鮮な感動を覚えます。

たゆみない文化財保護活動により、このような地域の歴史が次第に明らかになりつつありますが、調査記録をとどめた本報告書が活用されてはじめて、地区および市域の方々の財産として生命を与えられることになります。また、そうなることを切に望む次第です。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解を賜りご協力いただきました地元関係者の皆様、ならびに発掘調査に従事された方々に深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

2021年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田昭久

例　　言

1. 本書は民間開発に先立ち実施された、長野県飯田市下殿岡所在の下の原A遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成4年度に現地作業、同5年度に整理作業、令和2年度に報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点設置測量を株式会社ジャステックに委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号TSHに地番を付し、TSH463-1を一貫して用いた。
6. 調査時には以下の遺構略号を使用している。
　縦穴建物址－SB、溝址－SD、土坑－SK
7. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
8. 第1表中の石器の石材表記は、硬砂岩を「硬」、緑色岩を「綠」と略記した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行った。
10. 本書の執筆と編集は馬場が行った。
11. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している

目 次

本文目次

序		第2節 基本層序	10
例言		第3節 遺構と遺物	10
目次		(1) 壊穴建物址	10
第I章 経過	1	(2) 溝址	13
第1節 調査の経過	1	(3) 土坑	13
第2節 調査組織	1	(4) その他	14
第II章 環境	3	(5) 遺構外出土遺物	14
第1節 自然環境	3	第IV章 総括	31
第2節 歴史環境	3	引用参考文献	34
第III章 調査結果	10	報告書抄録	49
第1節 調査区の設定	10		

挿図目次

挿図1 調査地点位置図	4	挿図12 周辺柱穴平面図(4)	20
挿図2 調査遺跡および周辺遺跡位置図	7	挿図13 周辺柱穴平面図(5)	21
挿図3 基準メッシュ図調査位置図	8	挿図14 周辺柱穴平面図(6)	22
挿図4 遺構全体図	9	挿図15 周辺柱穴平面図(7)	23
挿図5 壊穴建物址41	10	挿図16 周辺柱穴平面図(8)	24
挿図6 溝址1	11・12	挿図17 周辺柱穴平面図(9)	25
挿図7 土坑1201～1210	15	挿図18 周辺柱穴平面図(10)	26
挿図8 土坑1211～1222	16	挿図19 周辺柱穴平面図(11)	27
挿図9 周辺柱穴平面図(1)	17	挿図20 周辺柱穴平面図(12)	28
挿図10 周辺柱穴平面図(2)	18	挿図21 周辺柱穴平面図(13)	29
挿図11 周辺柱穴平面図(3)	19		

図版目次

第1図 下の原A遺跡出土遺物(1)	35	第4図 下の原A遺跡出土遺物(4)	38
第2図 下の原A遺跡出土遺物(2)	36	第5図 下の原A遺跡出土遺物(5)	39
第3図 下の原A遺跡出土遺物(3)	37		

表 目 次

第1表 土坑觀察表.....	30
----------------	----

写真図版目次

図版 1 調査区全景.....	41	図版 5 出土遺物（2）.....	45
図版 2 溝址 1	42	図版 6 出土遺物（3）.....	46
図版 3 竪穴建物址41 発掘作業風景.....	43	図版 7 出土遺物（4）.....	47
図版 4 出土遺物（1）.....	44	図版 8 出土遺物（5）.....	48

第Ⅰ章 経過

第1節 調査の経過

平成4年9月9日、試掘調査に着手した。重機により試掘坑を掘削し、引き続き作業員を入れて遺構・遺物の確認作業を行った。その結果、縄文時代および中世の遺構・遺物が確認された。そこで、建物等地下に影響を及ぼす部分については発掘調査をして記録保存を図ることとなった。

平成4年11月7日、本発掘調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行い、16日、作業員を入れて調査を開始した。重機の荒れ土を除去し、竪穴建物址・溝址・土坑・小柱穴その他の遺構を検出し、順次掘り下げて精査した。そして、全体および個別の写真撮影、補足の測量調査等を行い、12月19日、現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・復元等整理作業を平成5年度にかけて行った。

令和2年度は本報告書刊行作業を行った。

第2節 調査組織

(1) 調査団

調査担当者	小林 正春・馬場 保之
調査員	佐々木嘉和・佐合 英治・山下 誠一・吉川 豊・吉川 金利・穂谷恵美子 福澤 好晃・下平 博行
作業員	池田 幸子・市瀬 長年・金井 照子・金子 裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ 木下 早苗・木下 玲子・吉良 忠雄・柳原 勝子・小池千津子・小平不二子 小林 千枝・齊藤 徳子・塙 澄子・清水 三郎・菅沼和加子・滝上 正一 田中 恵子・塙原 次郎・丹羽 由美・萩原 弘枝・林 勢紀子・原田四郎八 平栗 陽子・福沢 育子・福沢 幸子・細田 七郎・牧内喜久子・牧内とし子 牧内 八代・松下 直市・松下 真幸・松下 光利・松本 茜子・三浦 厚子 南井 規子・宮内真理子・森 信子・森藤美知子・矢澤 博志・山田 康夫 吉川 悅子・吉川紀美子・吉沢まつ美

(2) 指導 長野県教育委員会

(3) 事務局 飯田市教育委員会

平成4・5年度

安野 節	(社会教育課長)
原田 吉樹	(" 文化係長)

小林 正春 (" 文化係)
吉川 豊 (" ")
山下 誠一 (" " " 、平成 5 年度)
馬場 保之 (" " ")
吉川 金利 (" " " 、平成 5 年度)
瀧谷恵美子 (" " ")
福澤 好晃 (" " ")
下平 博行 (" " " 、平成 5 年度)
篠田 恵 (" 社会教育係、平成 4 年度)
岡田 茂子 (" 社会教育係、平成 5 年度)

令和 2 年度

馬場 保之 (生涯学习・スポーツ課文化財担当課長)
宮澤 貴子 (" 課長補佐兼文化財担当主幹)
関島 隆夫 (" 課長補佐兼文化財用地担当技幹)
下平 博行 (" 課長補佐兼文化財保護係長)
瀧谷恵美子 (" 文化財保護係)
村山 博則 (" " ")
春日 宇光 (" " ")
佐々木祐里香 (" " ")
伊藤 尚志 (" 文化財活用係長)
坂井 勇雄 (" 文化財活用専門主査、文化財活用係長)
羽生 俊郎 (" 文化財活用係)
西脇 充 (" " ")

第Ⅱ章 環境

第1節 自然環境（挿図1）

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三徳地区に接する。

飯田市は赤石山脈（南アルプス）と木曾山脈（中央アルプス）にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川に平行する河岸段丘地形を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。

伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。

西半は木曾山脈の前山である笠松山（1271m）・高島屋山（1397m）東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高島屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。なお、扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近は通例湧水が豊かであるが、これら扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸として利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は、現在堆積作用より下谷作用に転じているが、浸透力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。

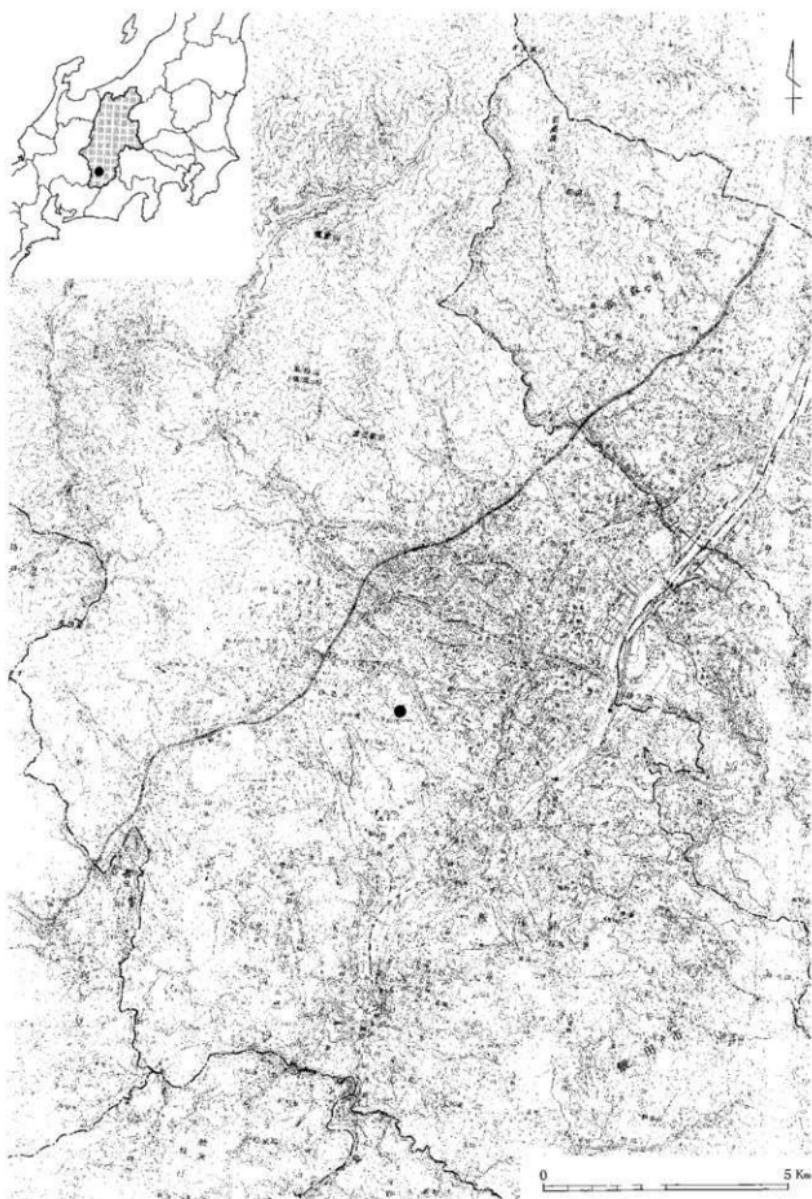
これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。

古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行われ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

下の原A遺跡は、毛賀沢川に面した中位段丘上、笠松山系から伸びる微高地の末端に位置する。調査区全面にロームが遺存しており、集落を営むのに適した所といえる。

第2節 歴史環境（挿図2）

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野、北方北の原（旧：山口）、北方西の原（旧：西ノ原）の各遺跡、中央自動車道建設にかかるよ志原（旧：ようじ原）、上中村（旧：上ノ平東部）、大羽（旧：寺山）、大東（旧：六反田）、酒屋前南（旧：大東）、酒屋前（旧：酒屋前、滝沢井尻）、小垣外・辻垣外、金谷（旧：三壱渕、上の金谷）の各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原、八幡面、小垣外・辻垣外の各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外、火振原、梅ヶ久保、細田北、河原林、北方大原（旧：大原、直刀原）、入野、立野、北方北の原の各遺跡、圃場整備に伴う小竹（旧：三尋石）、増泉寺付近、富士塚、富の平、中村中平の各遺跡、諸開発に伴う北方西の原、三尋石、酒屋前南（旧：酒屋前）、はりつけ原、中島平、宮ノ先、櫛口、鳥屋平、中川、下の原A（旧：下原）、高野、公文所前等の各遺跡がある。



挿図1 調査地点位置図

こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代草創期までさかのぼる。北方北の原遺跡では爪形文土器・表裏繩文土器・押型文土器（立野式・樋沢式・細久保式土器）が出土している。加えて、立野式土器の標式遺跡である立野遺跡や北方北の原（旧：山口）遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では小垣外・辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴建物址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下の原A（旧：下原）、公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に、下の原A（旧：下原）遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一画が調査されている。後期中葉から晩期にかけては、茂都計川に面した中村中平遺跡で、配石址・竪穴建物址・配石墓等の遺構や土偶・土製耳飾り・石棒・石剣を含む多量の遺物が調査され、不明な点の多かった該期の様子が解明された。また、北方北の原遺跡では、縄文時代晚期後葉の竪穴建物址1棟・土器棺墓等が調査されている。この他、酒屋前・小垣外・辻垣外・殿原遺跡で断片的な資料ではあるが、遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてではなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。これまで調査された遺跡としては酒屋前南（旧：大東）、金谷（旧：上の金谷）、酒屋前（旧：酒屋前、滝沢井尻）、宮ノ先、中島平、中村中平、下の原A（旧：下原）遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田經營と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡では散在ながらも比較的大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から3軒の竪穴建物址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少ないが、平成26・27年度に発掘調査を実施した北方西の原遺跡では、4世紀中頃に位置づく当地方3例目の前方後方墳である笛吹2号古墳と同5号古墳（小型で低墳丘の方墳）、5世紀後半の同3号古墳（円墳）・同1号古墳（方墳）や周溝墓・土壙墓群、それに南信地区では初見の積石塚3基等が調査された。いずれもこれまでの当地方の古墳時代観を覆すものである。一方、同時代の集落址の調査例は少なく、前期後半の金谷（旧：上の金谷）、後期の金谷（旧：三壺測）や中島平遺跡、後期の中村中平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、小河川や湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられる。中村中平遺跡では、遺跡北側の台地の縁に大名塚古墳が現存し、他に消滅したものとして中村狐塚古墳・寺畠古墳・宮原2号古墳があり、これらの築造を担った集落であろう。

奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は中村中平遺跡のみであり、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、莊園を構成する村落の起源等に関連すると考えられる箇所があり、重要な役割を果たした地区ということができる。

平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。10世紀末一条天皇朝には妙香院領、11世紀中頃後冷泉天皇朝以降尊勝寺領であった（下伊那誌編纂会 1961）。その中には中村・久米・川路・殿岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたこ

とが考えられる。伊賀良井はじめ、当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともいわれている。殿原遺跡の溝址3の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。なお、殿原遺跡では溝址3に近接して、馬の飼育に関連すると考えられる建物址・柵列が調査されている。詳細時期は不明であるが、溝址3とは重複がなく、伊賀良井・溝址3、毛賀沢川に画された部分に占地していることから、私牧に関わる遺構の可能性が指摘できる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、大東（旧：六反田）、酒屋前（旧：滝沢井戸）、小垣外・辻垣外、金谷（旧：三壺渕・上の金谷）、宮ノ先、公文所前遺跡等地区内のほぼ全城にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区的開発が一段と進んだ証左であろう。隣接する山本久米地区には、12世紀半ばには天台宗であった可能性が指摘され（佐藤 2013・2014）、現在は真言宗の古刹、光明寺がある。光明寺には、胎内に「保延六年」（1140年）の銘を持つ薬師如来坐像があり、また、かつては鎌倉初期に位置づけられていたものの近年12世紀代に遡ることが指摘されている阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。また、保元元年（1156）に光明寺の僧願西が埋納した如法経の経筒が熊野那智山で発見されている（佐藤 同前）。寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいち早く中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと考えられる。また、さらに、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土師洞窯址（旧：土器《かわらけ》洞1号窯跡）があり、ここで生産された須恵器が下伊那全城に分布するなど、手工業生産の発達がみられる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。

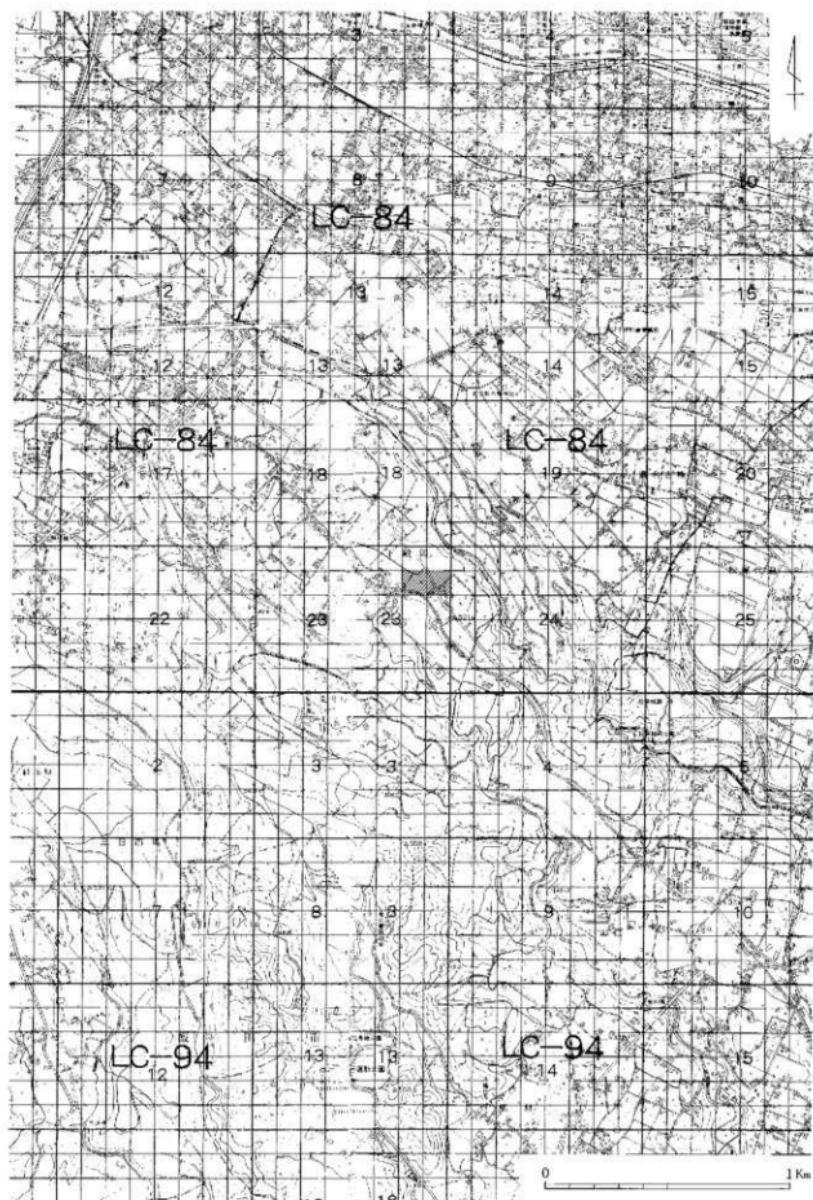
北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区的開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鉢岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

以上、各時代について概観したが、こうした歴史の脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは、本書の内容により明らかにされるといえる。

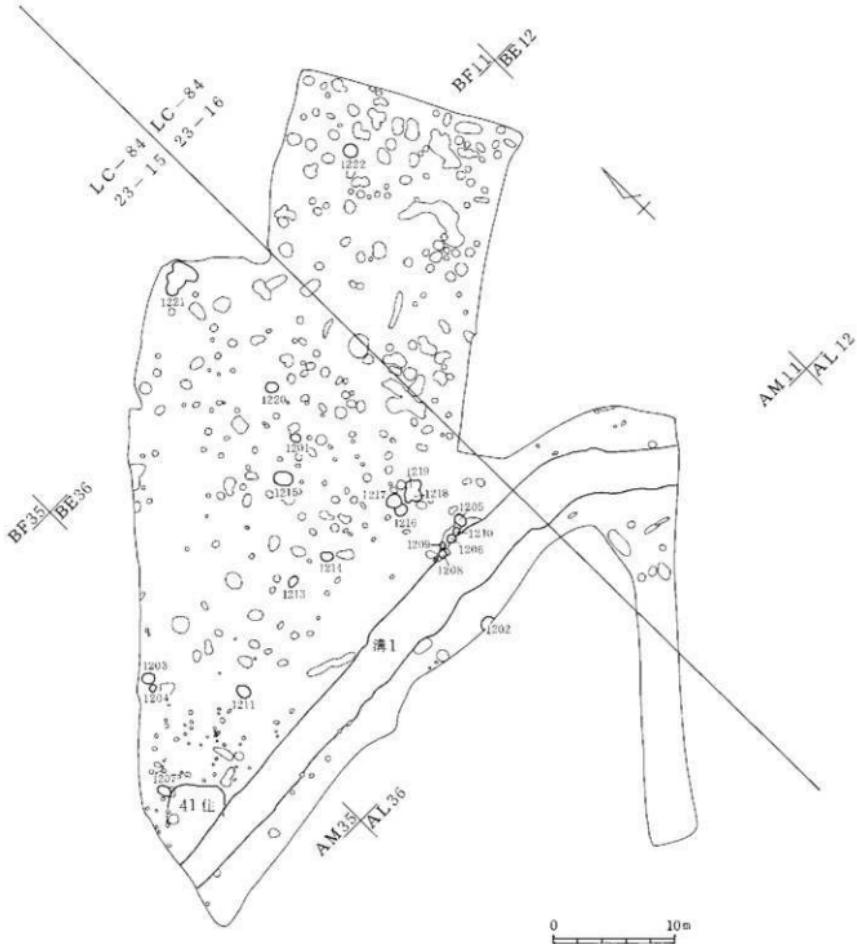


- 1.下の原A遺跡（今次調査地点） 2.同前（旧：下原遺跡） 3.殿原遺跡 4.八幡面遺跡
 5.北方西の原遺跡（旧：西ノ原遺跡） 6.同前 7.育良社付近遺跡 8.北方北の原遺跡
 9.金谷遺跡（旧：上の金谷遺跡） 10.同前（旧：三瀬渕遺跡） 11.小垣外・辻垣外遺跡
 12.酒屋前遺跡（旧：滝沢井尻遺跡） 13.酒屋前遺跡（旧：酒屋前遺跡） 14.酒屋前南遺跡（旧：酒屋前遺跡）
 15.はりつけ原遺跡 16.中島平遺跡 17.宮ノ先遺跡 18.櫛口遺跡 19.中川遺跡
 20.土師洞窯址（旧：土器洞1号窯跡） 21.鈴岡城址 22.松尾城址

擇図2 調査遺跡および周辺遺跡位置図



挿図3 基準メッシュ図調査位置図



挿図 4 遺構全体図

第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査区の設定（挿図3）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（日本測地系に拠る。以下、「基準メッシュ図」と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-84 23-15・16内に位置し、23-16をI区、23-15をII区とした。

第2節 基本層序（挿図6）

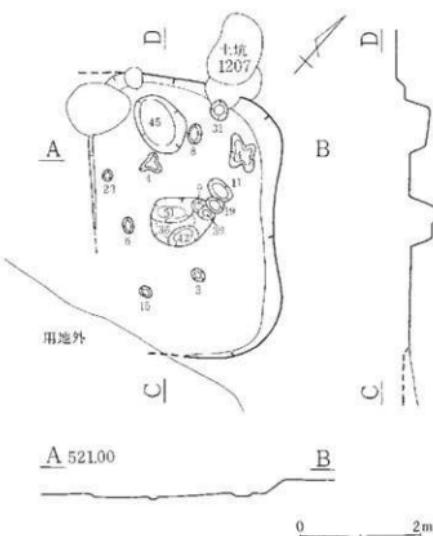
地表より黄色土やや混の褐色土1層（層厚15~20cm）で、地山であるロームに至る。遺構確認面までの深さはやや浅く、以前に耕作に関連し発破がほぼ全面にかけられている。発破による搅乱が各所で確認される一方で、遺構の遺存状況もまた比較的良好である。

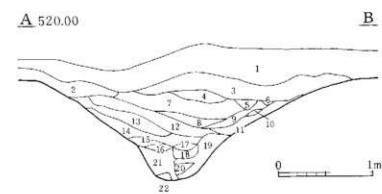
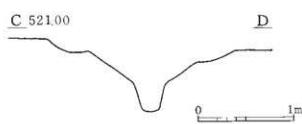
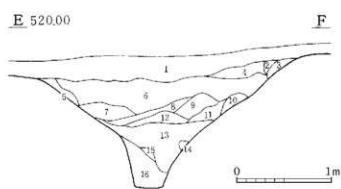
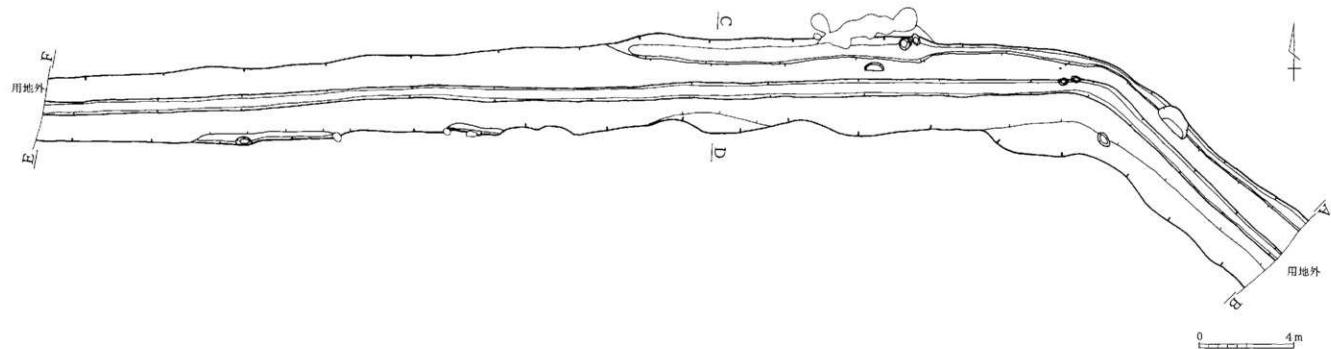
第3節 遺構と遺物（挿図4）

今次調査で確認された遺構・遺物は以下のとおりである。遺構番号については、以前に調査した隣接地で発見されたそれぞれの遺構の続き番号を付した。

（1）竪穴建物址

① 竪穴建物址41（挿図5）
【検出位置】 AQ32・AR31・AR32・AS31 【規模】 4.6×3.0m以上、深さ22cm 【床面積】 -m²
【形態】 不整隅丸方（ないし長方）
形 【長軸】 北東壁の方向はN40°W
【重複等】 土坑1207と近接する
【調査所見】 南西側は削平を受け、把握できず 【埋土】 暗褐色土
【壁】 北東壁は比高差25cm程度で緩やかに立ち上がる 【床】 ほぼ平坦であるが、硬い部分は確認できず
【周溝】 なし 【柱穴】 北西壁際に





- | | |
|-------------|---------------|
| 1 黄色土や今宿褐色土 | 11 黄色土混暗褐色土 |
| 2 黑褐色土混黄色土 | 12 黄色土や少泥暗褐色土 |
| 3 暗褐色土 | 13 暗褐色土 |
| 4 黄褐色土 | 14 褐色土 |
| 5 暗褐色土混黄色土 | 15 黄色土混褐色土 |
| 6 黑褐色土混明褐色土 | 16 黄色土や少泥暗褐色土 |
| 7 灰褐色土 | |
| 8 黑褐色土混黄色土 | |
| 9 暗褐色土混黄色土 | |
| 10 地山 | |

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 黄色土や少泥暗褐色土 | 12 暗褐色土 |
| 2 黑褐色土や少泥明褐色土 | 13 暗褐色土 |
| 3 黑褐色土多泥褐色土 | 14 褐色土 |
| 4 黄褐色土 | 15 黄色土や少泥暗褐色土 |
| 5 明暗褐色土 | 16 黄色土や少泥明褐色土 |
| 6 黄色土混黑褐色土 | 17 * |
| 7 暗褐色土 | 18 暗褐色土 |
| 8 明褐色土 | 19 黄褐色土混暗褐色土 |
| 9 明灰褐色土 | 20 暗褐色土 |
| 10 黄色土混褐色土 | 21 褐色土 |
| 11 明褐色土 | 22 明灰褐色土 |

挿図6 溝址1

110×70cm、深さ45cmの楕円形を呈する穴が掘り込まれるが、底面は平坦でなく、また他にこれに組み合ふ穴なし〔炉〕なし。ほぼ中央部で検出した100×80cm、深さ36cm（但し、両側が深くくぼむ）不整形の穴は破却された炉の痕跡とも考えたが、底面は焼土や焼け結まった痕跡はない〔出土遺物〕なし
〔時期〕詳細時期不明であるが、縄文時代中期中葉ないし後葉と考えられる土坑1207と近接して検出されたことから、該期に位置づく可能性もある。

（2）溝址

①溝址1（挿図6、第1図）

【検出位置】西端部はAP30・AQ30、東端部はAM 4・AO 5で検出した。AP01・AR02付近で屈曲する〔重複〕竪穴建物址41、土坑1206・1208・1210を切る〔調査所見〕埋土の状況から、掘削土は北側を中心に両側に掻き上げられたと考えられ、下半の埋戻し後溝の北側に掻き上げられた土がマウンド状に残っていた可能性が考えられる。底面に水が流れた痕跡はない。また、下半に極あるいは管状のものが敷設されたり、底面に逆茂木等が設置されたりした痕跡は確認できない。なお、掘削面で農具の刃先痕等は確認できなかった〔規模〕確認できた延長は屈曲より西側で45m、東側で10mを測る。西端部で上部幅280cm・中段幅60cm、東端部で上部幅400cm・中段幅40cmを測る。深さは、西端部140cm（このうち下部の直に掘り込まれた部分の深さは50cm）、東端部105cm（このうち下部の直に掘り込まれた部分の深さは40cm）〔主軸〕屈曲部より西側はN90° E、屈曲部より東側はN134° E〔断面形〕上半はやや緩やかな傾斜なのに対し、下半は直に掘り込まれる箱築研状を呈する。上半は、西端部で俯角35～38°、東端部で俯角29～35°程度を測る〔埋土の状況〕下半と上半で堆積状況は大きく異なる。西端部断面（E-F）では13層上面がほぼ平坦であり、東端部断面（A-B）では15・17・19層上面がこれに対応する。上半は当初北側からの流れ込みにより徐々に埋まり、その後両側から埋まっている。これに対し、下半ははじめ南側から、次に北側から屈曲部付近まで埋まっており、掘削後あまり時間を置かず一気に埋め戻されたと考えられる〔出土遺物〕遺物出土は上半が主で、流れ込みの縄文時代中期に位置づく土器・石器、近世後期の磁器類（27～34）が出土した〔時期〕流れ込み以外の遺物はなく、開削された時期は不明である。

（3）土坑（挿図7・8、第1表、第1～3図）

小規模なものが多く、その中で遺物出土のあるものは限られる。特記されるものののみを記す。

土坑1201から縄文中期中葉の非在地系土器底部（1）、土坑1205は硬砂岩製の横刃形石器（36）が出土した。土坑1206からは縄文中期中葉の非在地系土器底部（2）、硬砂岩性の横刃形石器（35・37・38）が出土した。土坑1207は縄文中期中葉ないし後葉の在地系土器底部（3）、緑色岩製の敲打器（39）・打製石斧（40）、磨石（41）、硬砂岩製の横刃形石器（42）が出土。打製石斧は刃部が摩耗する。土坑1208出土の砥石（43）は赤色砂岩製で、土坑1210（44）、土坑1213（45）、土坑1216（46）はいずれも硬砂岩製の横刃形石器が出土した。土坑1217（8）は約12m離れて接合、隆帯と押引沈線によるモチーフに沈線を充填する。薄手の土器で在地系かと考えられるが詳細は不明である。4・5・47は土坑1219から出土、4は細隆線文、5は非在地系で沈線により三叉文が描かれる。土坑1220からは深鉢片（6）と硬砂岩製の石器（48～50）が出土した。6は口縁外縁に強く幅狭な沈線が引かれ、隆帯上に連続押引される。

藤内Ⅱ式に比定される。土坑1219の緑色岩製横刃形石器（47）は全体が、また、土坑1220の打製石斧（48・49）は刃部を中心に、それぞれ摩耗している。土坑1220の横刃形石器（50）は背面に広く摩耗がみられる。土坑1221からは中期中葉末から後葉の細隆線文土器片（7）および緑色岩製の磨製石斧（51）が、また土坑1222からは硬砂岩製の打製石斧（52）が出土した。

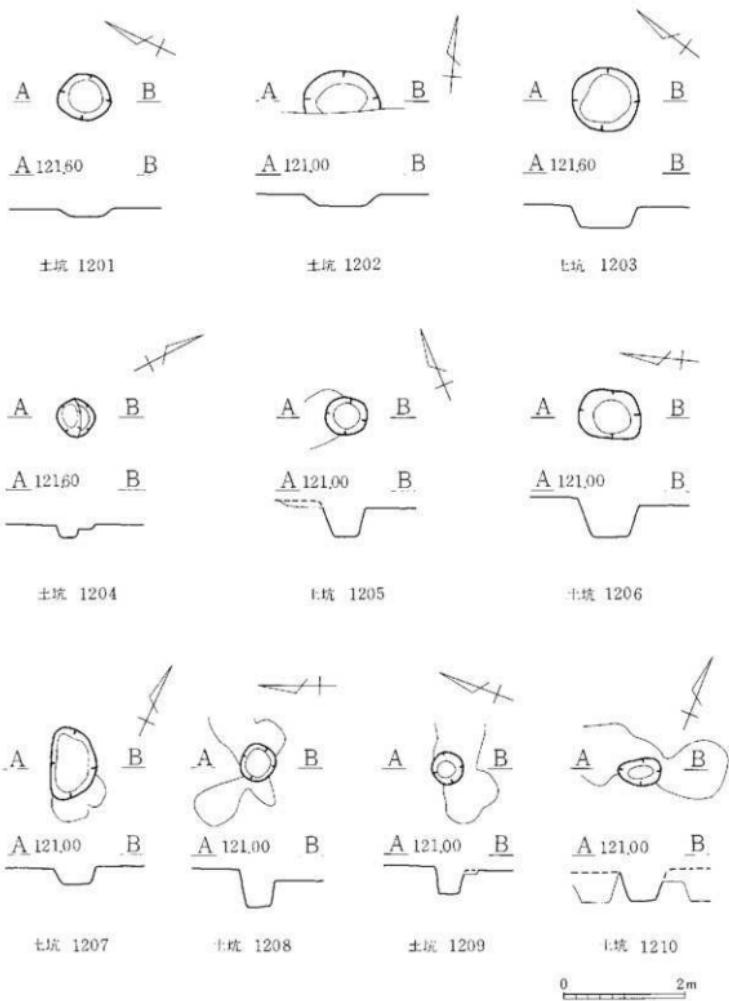
（4）その他（挿図9～21）

調査区全体で小柱穴群を検出した。径20～30cm程度の平面円形を呈するものは中・近世の建物址等の柱穴である可能性があるが、組み合うものではなく、詳細は不明である。

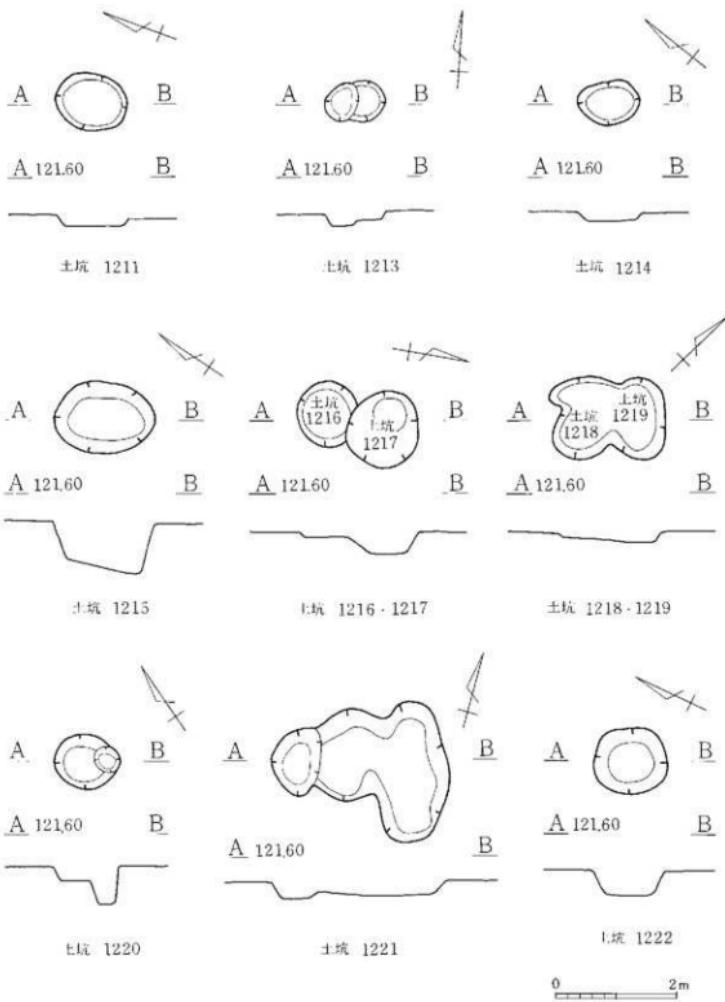
（5）遺構外出土遺物（第1～5図）

9は口縁外縁に連続して刻みが施され、外面は隆帯を沈線でなぞる。口端部の把手が剥落する。非在地系の土器で、北陸系かと考えられる。10は口縁外縁を強くナデつけ、口縁部を肥厚させる非在地系土器である。11・12は東海系かと考えられる土器で、11は三叉文、12は地文繩文で口縁部に山形の突起が付されるかもしれない。13は隆帶区画内に沈線を充填される下伊那型の櫛形文、14・18は隆帶文に連続押引を施す藤内Ⅱ式に比定される。15は半截竹管によるコンパス文と平行沈線で、平出ⅢA式に比定される。16・17・23は非在地系土器で、16は縦位の隆沈線に綾杉状の沈線、17・23は沈線文が付される。19は平出ⅢA式に比定され、眼鏡状隆帶の下位に沈線が付される。20は中期後葉の加曾利E式系、21・24は下伊那型櫛形文、22は平出ⅢA式、25は垂下する2条の細隆線による区画内を綾杉状の沈線で充填する。26は沈線文に連続押引が併用される非在地系土器である。

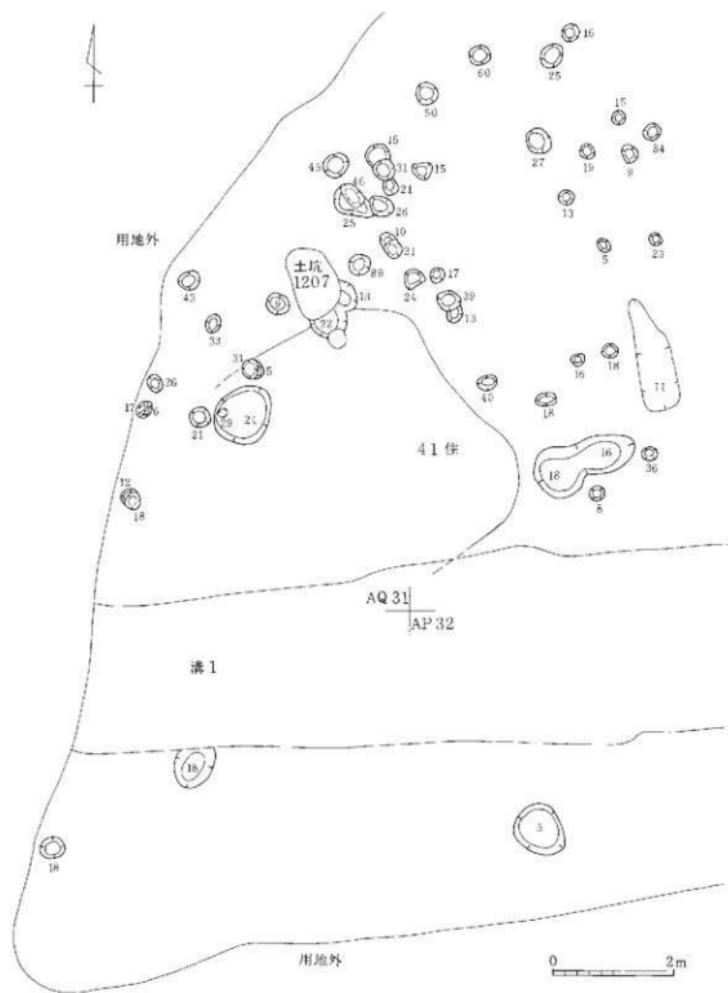
打製石斧（53～71・73・74）は硬砂岩製が主体で、72は緑色岩製である。77は硬砂岩製の粗製石匙である。黒曜石製の剥片（97）は溝址1の混入出土で、旧石器時代の石刃の可能性がある。石錘（98～100）は硬砂岩製。101・102は緑色岩製の磨製石斧、103は砂岩製の敲打器。磨石（104）は凝灰岩製と考えられる。105・106の台石は摩耗痕がある。



挿図7 土坑1201~1210



挿図8 土坑1211~1222



挿図9 周辺柱穴平面図(1)

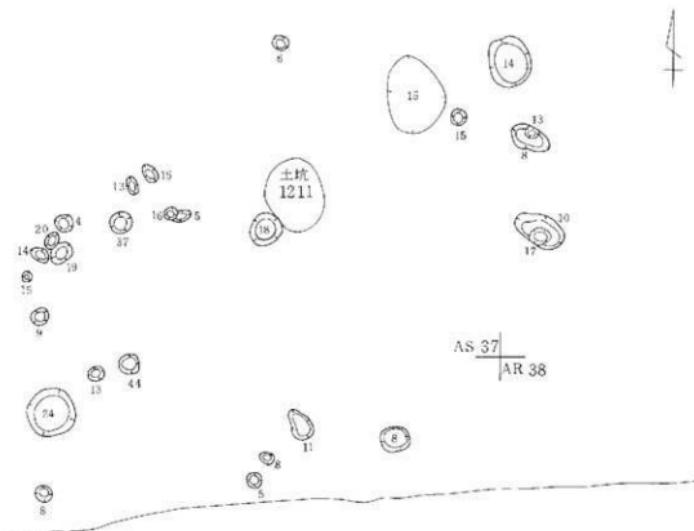


図1

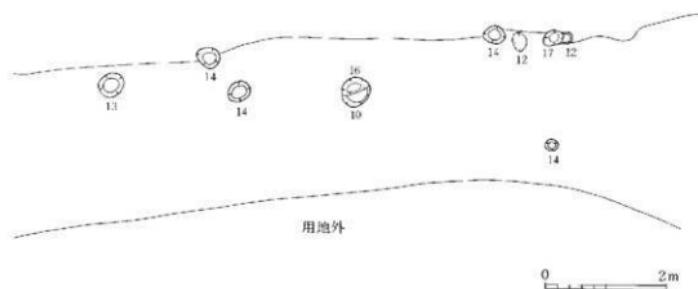
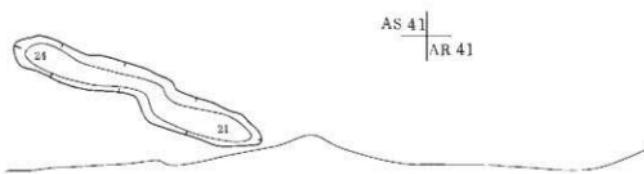
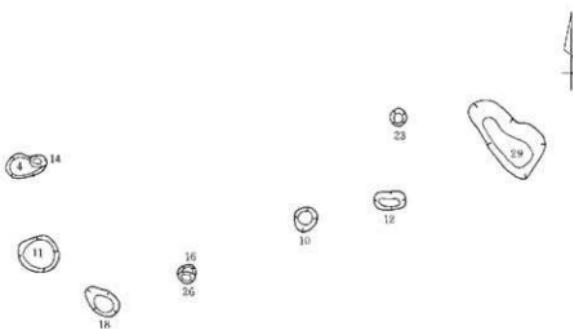
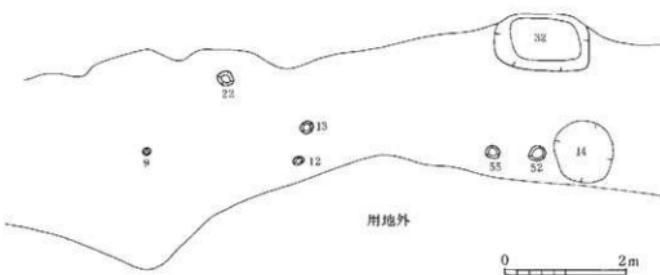


図10 周辺柱穴平面図 (2)



溝 1



挿図11 周辺柱穴平面図 (3)

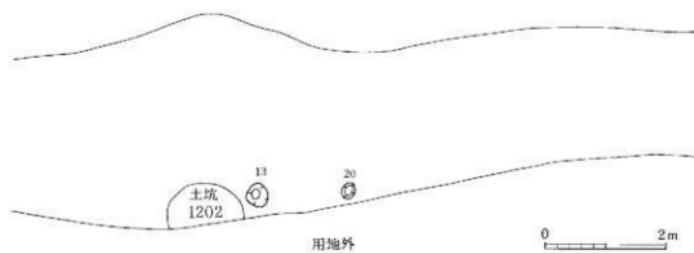
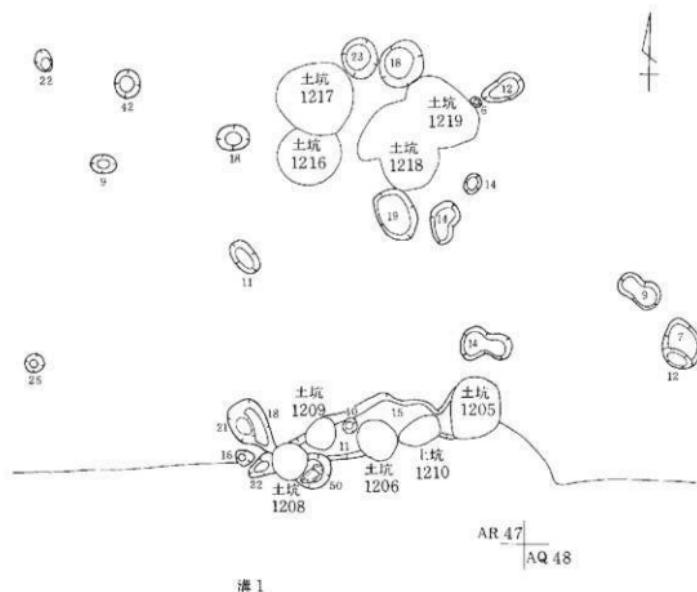


插圖12 周邊柱穴平面圖（4）

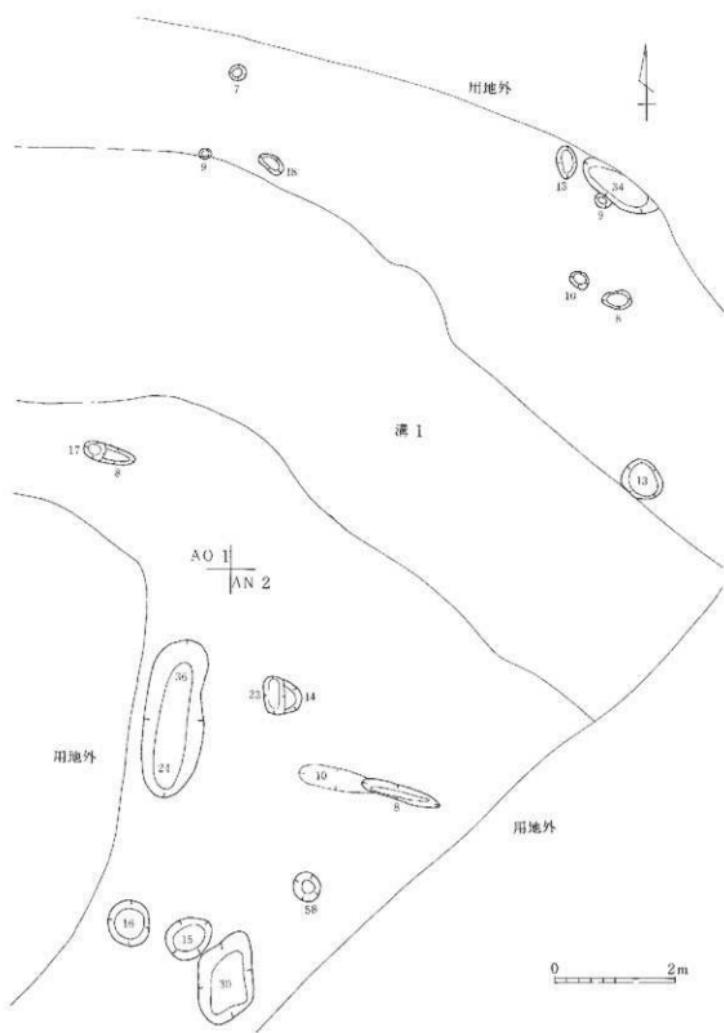
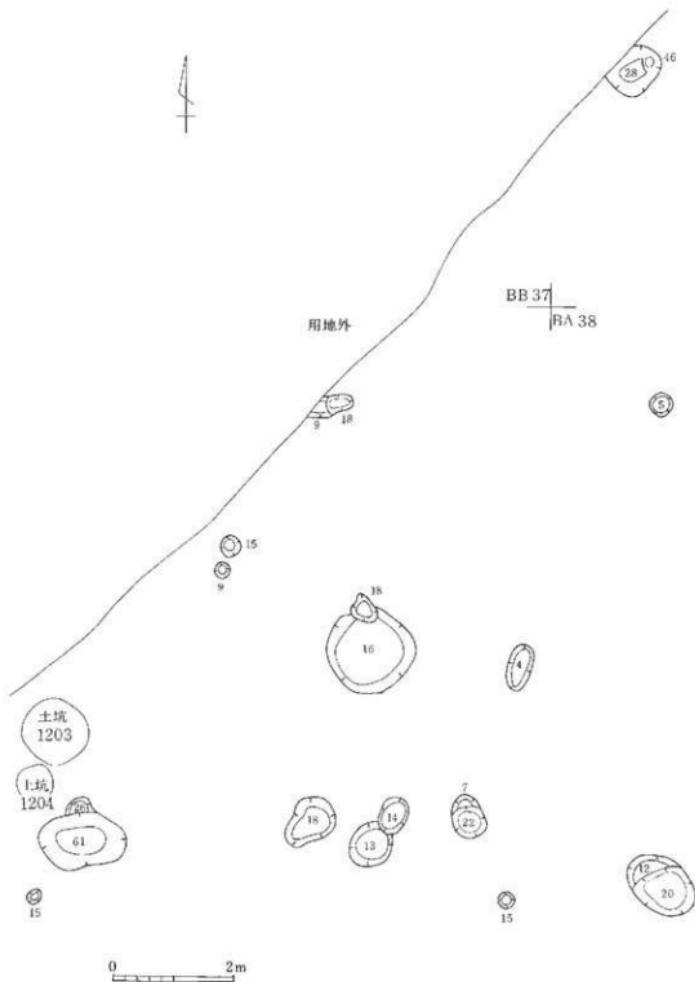
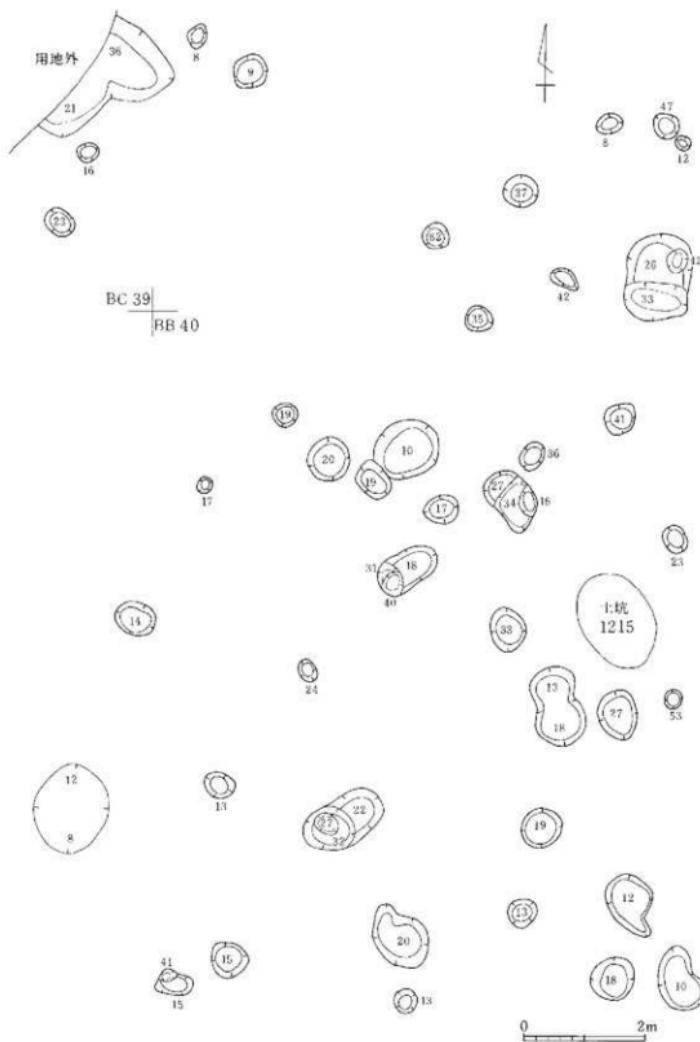


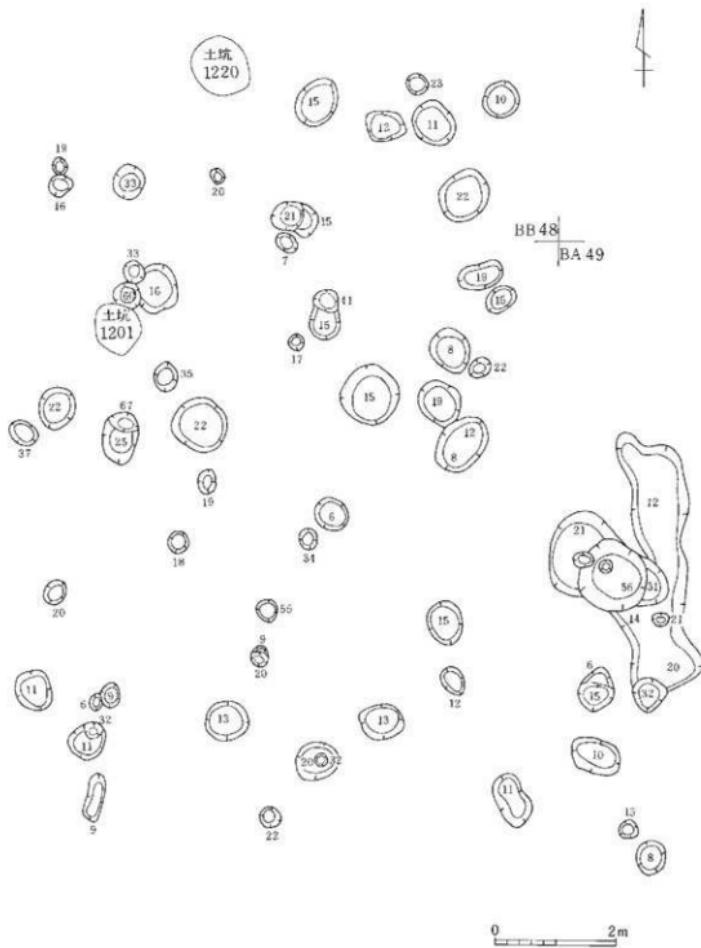
插图13 周边柱穴平面图 (5)



挿図14 周辺柱穴平面図（6）



挿図15 周辺柱穴平面図(7)



挿図16 周辺柱穴平面図 (8)

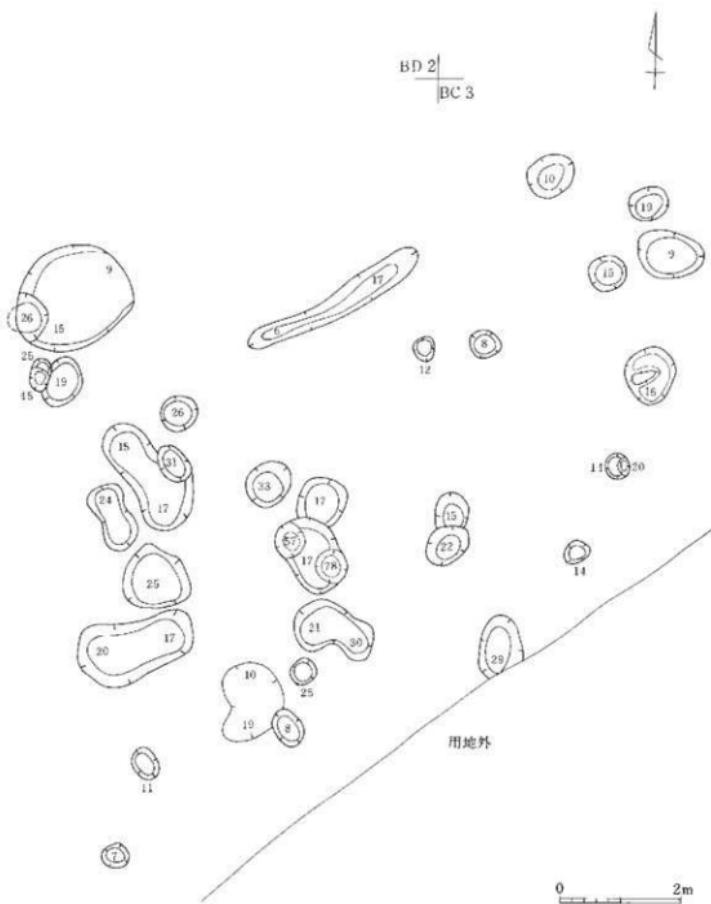
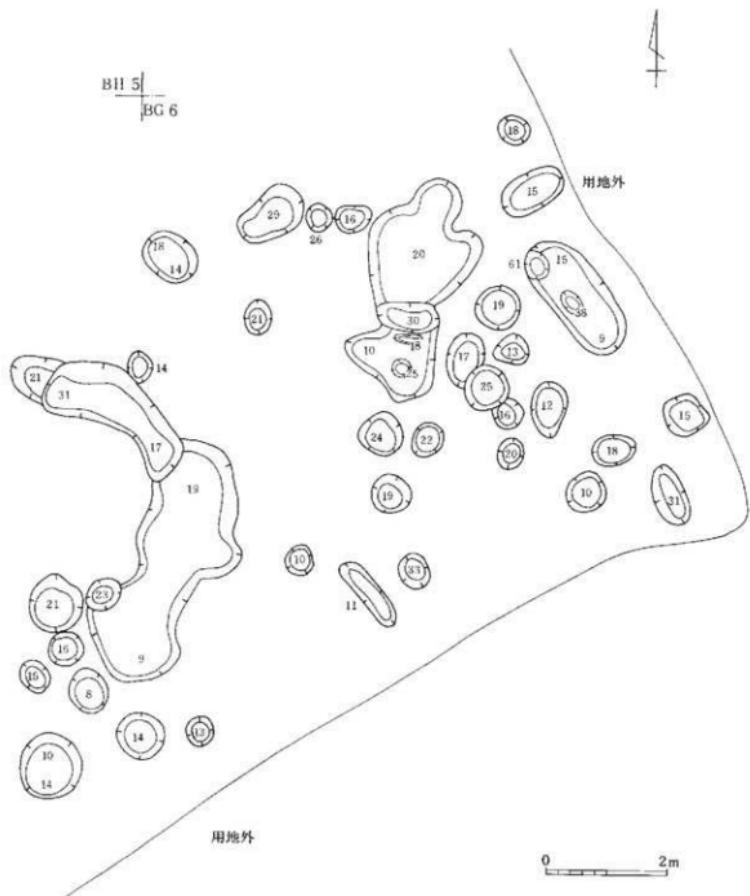
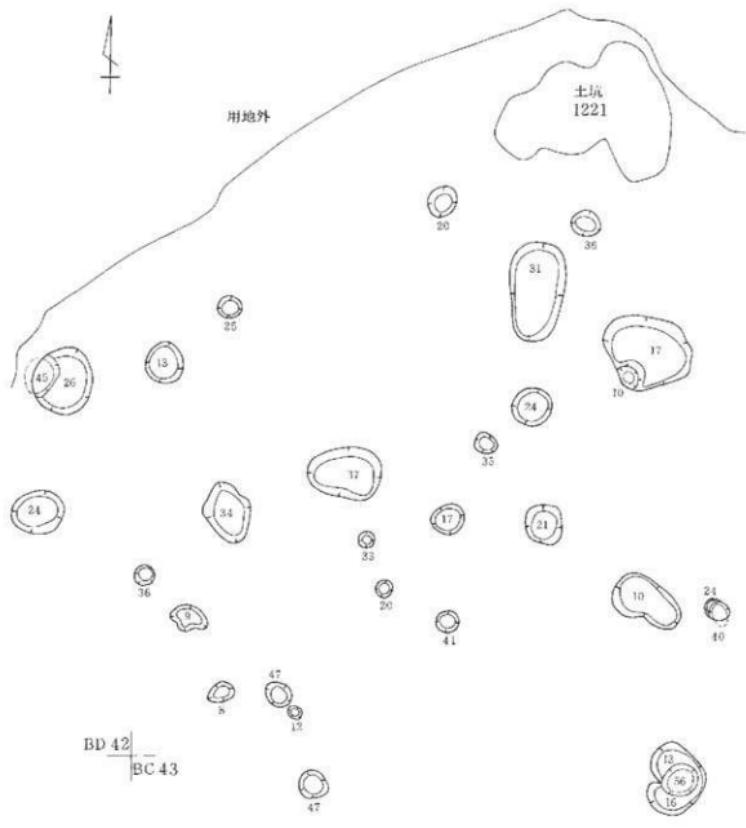


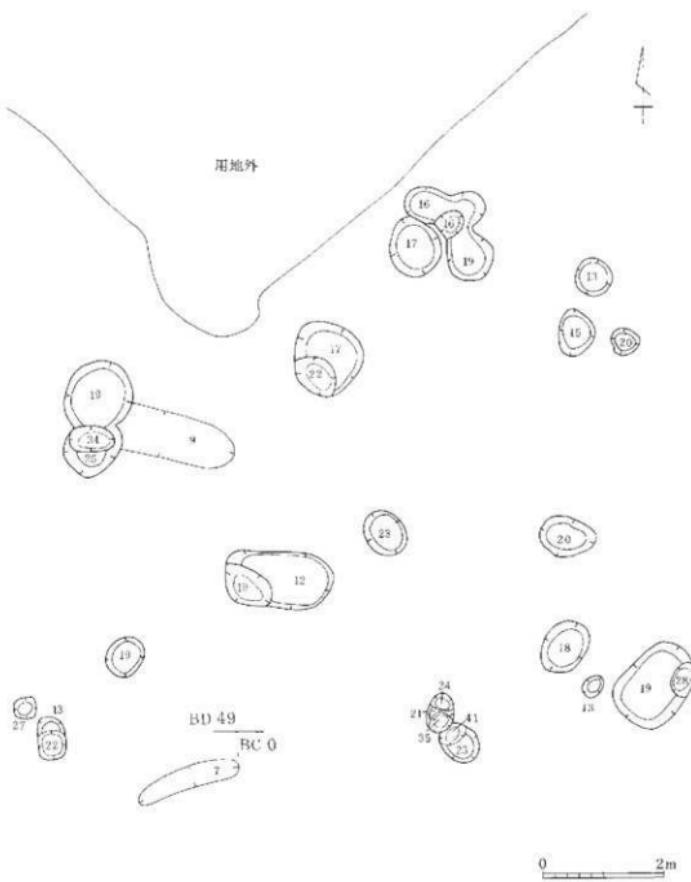
插图17 周边柱穴平面图 (9)



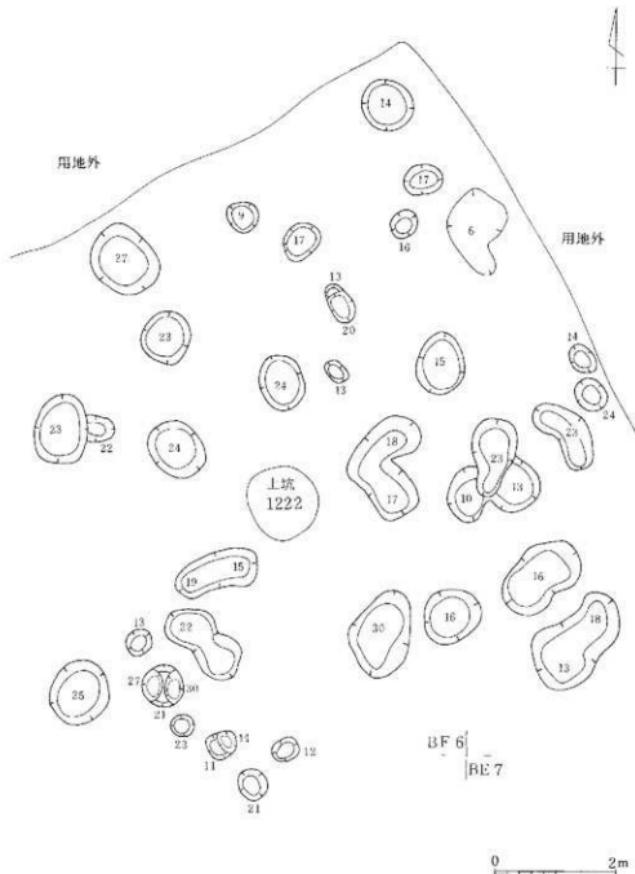
挿図18 周辺柱穴平面図 (10)



挿図19 周辺柱穴平面図 (11)



挿図20 周辺柱穴平面図 (12)



挿図21 周辺柱穴平面図 (13)

第1表 土坑観察表

土坑No.	検出位置	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形	埋土	出土遺物
1201	BE49	88×72	15	円形	—	縄文時代中期中葉深鉢片
1202	AT0	124×—	21	横円形	褐色土	
1203	BE41他	108×108	40	円形	暗褐色土	
1204	BF41他	60×60	21・7	方形	暗褐色土	
1205	AR46他	68×64	64	円形	黒色土	横刃形石器(硬)
1206	AS47	104×80	62	横円形	黒色土	縄文時代中期中葉深鉢片、横刃形石器(硬)
1207	AQ29他	120×76	29	横円形	暗褐色土	縄文時代中期中葉ないし後葉深鉢片、敲石(綠)、打製石斧(綠)、磨石、横刃形石器(硬)
1208	AS47他	60×56	63	円形	—	
1209	AS47	52×52	45	円形	暗褐色土	
1210	AR47他	68×44	63	横円形	暗褐色土	
1211	AT36他	120×92	11	横円形	褐色土	
1213	AV41他	100×68	26・17	瓢箪形	黒褐色土	
1214	AU42他	104×68	24	横円形	暗褐色土	
1215	AX42他	164×120	88	横円形	暗褐色土	
1216	AS44他	104×104	11	円形	褐色土	
1217	AS44他	120×120	39	円形	黒褐色土	縄文時代中期中葉深鉢片
1218	AS44他	136×—	11	不整形	暗褐色土	
1219	AR44他	136×—	18	不整横円形	暗褐色土	縄文時代中期中葉末～後葉深鉢片
1220	BD47他	108×92	27(66)	横円形	黒褐色土	縄文時代中期中葉深鉢片
1221	AY37他	292×232	26(33)	不整形	漆黒土	縄文時代中期中葉末～後葉深鉢片
1222	BG4他	124×108	40	円形	漆黒土	打製石斧(硬)

第IV章 総括

今次調査で特筆される遺構は溝壠1である。今次調査地点の西側、溝壠1延長線上には伊賀良井（大井）があり、調査地点付近で伊賀良井は東南東方向に流れを変えている。一方、鈴岡小笠原氏の居城鈴岡城は南東約1.2km（主郭までの距離）にある。そこで、両者との関係性について考えてみる。

1 伊賀良井（大井）について

伊賀良井は、飯田松川から取水され、中位段丘上を潤してきたが、その潤したエリアが信濃国守護小笠原氏の主要な基盤である伊賀良庄をカバーすることから、古代末以来当地方の政治・経済活動に重要な役割を果たしてきた灌漑用水といえる。

伊賀良井の開削主体及び開削時期は、これまで先学によりいくつかの説が提示されている。主なものを紹介すると、

①「伊賀良井」の原初的開削は莊園の領家である妙香院ないし尊勝寺等の指導的な開発により平安時代中期あるいは遅くも末期上葉に開始されたと推測、中世殊に鎌倉期に伊賀良庄地頭江馬北条氏により大規模な拡張、水路の延伸、耕地の拡大等行われたとする宮下操氏の説（下伊那誌編纂會 1967）

②「室町時代（それも余り早い時期ではない）に、領主小笠原氏の力によって、伊賀良井は名古熊及び上殿岡のはずし場まで引かれた。末期に松尾、鈴岡城が築かれるに及んで、伊賀良井の水は両城の用水に引かれた」とする筒井泰藏氏の説（伊賀良村誌編纂委員会 1973）

③『信州伊奈郡北方郷之舊記』により、奥山平太夫が承保2年（1075）北方南方両郷の中央笛吹に居館を構えるにつき水を引用したのに始まり、小笠原新左衛門光佐盛・弟の尾曾九助經廣の太郎井・次郎井伝承と松尾城・鈴岡城を結び付けた村沢武夫氏の説（村沢 1981）

文献上伊賀良庄の初出は、尊円親王編の『門葉記』所載の「妙香院莊園目録十一箇所事康平六年五月二十日注之」である（下伊那誌編纂會 同前）。また、伊賀良井から毛賀沢川に水落としたと考えられる殿原遺跡溝3出土の山茶碗（飯田市教委 1992）の年代観は、高台に耕穀痕があることから、12世紀半ば（藤沢良祐 2008）以降に位置づく。溝の性格上、遺物の流れ込みを考慮すると遺物の年代観は溝の開削時期を示すものではないが、康平6年（1063）以前に伊賀良庄が成立していたことを考え合わせると、宮下氏が推測するように、伊賀良井の開削は平安時代中期あるいは遅くも末期上葉に開始され、平安時代末期には上殿岡まで開削されていた可能性がある。

中世には、莊園領主の支配下にある莊務機関である公文所がおかれたと考えられる地名が今次調査地点の西方約600m付近にあり、この付近まで伊賀良井は延伸されていたものと考えられる。さらに、伊賀良井は、鈴岡城址の南側松ヶ崎（寺山ともいう）の尾根を切断して「外場（はずしば）」が設けられ、水を新川に落とされている。この外場は鈴岡城の堀に比肩されるもので、鈴岡城の防衛施設の一端を担う目的で開削された可能性がある（飯田市上郷考古博物館 2009）。鈴岡城に拠った小笠原氏により中世のある時期までには伊賀良井が鈴岡城まで延伸されていたことを示すと考えられる。

2 鈴岡城への引水について

鈴岡城は、信濃國守護を務めた鈴岡小笠原氏の居城で、南北朝時代に小笠原宗政が築城したとされるが、松尾小笠原氏から文明年間（1469～86）頃に分家したとされることから、この頃とみる説もある（羽生 2013）。

鈴岡城の水の手については、城内二の郭の井戸の他、用水が知られる。

用水の一つは、「鈴岡城への引水は、上殿岡のはずし場から伊賀良井の水を毛賀沢へ落していたのを、そのすぐ下流（久米街道のすぐ東の羽場地籍）から上げて、毛賀沢南斜面をたどって城中に引いた。これは清水井と呼ばれ今でもその井筋跡を見ることが出来る」とする筒井氏の説（伊賀良村誌編纂委員会 1973）で、宮下氏（下伊那誌編纂會 1970）や村沢氏（村沢 同前）も同じ立場である。北方・上殿岡境から毛賀沢川に沿った段丘縁辺部、鈴岡城址まで点々と「清水井」の小字が確認できる（伊賀良を広める会 2010、竜丘史学会 2013）。段丘の縁辺に沿わせて井水を引くという一般的な方法で、詳細時期不明ながら、北方西の原遺跡（飯田市教委 2017）の溝址001SD等に類例がみられる。なお、「清水井」取水口の上流部、上殿岡の「はずし場」は、殿原遺跡（飯田市教委1987・1992）で調査された溝址3とは異なり、溝址3の上流側約400mに位置する。

用水のもう一つは、前述の「伊賀良井は、（中略）大規模な改修は小笠原氏が鈴岡城（飯田市）に引いたときになされたともいわれている。」（福島 1999）との伊賀良井からの引水の記述である。上述の「はずし場」からの清水井の引水とは別内容と考えられるが、この説の論拠は示されていないため、詳細は不明である。

3 溝址1の形態と機能について

次に、溝址1の形態、特に断面形について、検討を加える。

断面形は、上部がやや緩やかにそして底部付近が直に掘り込まれる、逆三角形に近い箱薺研状を呈する。箱薺研状に掘り込まれた溝あるいは堀は、これまで市内では、座光寺地区の恒川遺跡群・稻荷坂遺跡、上郷地区の原の城城跡・今村遺跡、旧市地区の飯田城跡、伊賀良地区の殿原遺跡・三日市場大原遺跡・中川遺跡、竜丘地区的鈴岡城址等で確認されている。

恒川遺跡群14次調査地点1区溝址37（飯田市教委 1991）は古代伊那郡街の区画溝で、上部の幅約3m、下部約1.6～2m、深さ50～100cmで、中段までは緩やかで以下ほぼ垂直に掘り込まれる。断面は概ね逆台形を呈する。

殿原遺跡溝址3（飯田市教委 1992）は平安時代末期までには開整された灌漑用水と考えられ、ところどころ膨らむ部分を除くと、上部幅4m前後、底部幅3m前後で深さ100～150cmを測る。下半は垂直に立ち上がり、上半も比較的急な立ち上がりを示す、逆台形状を呈す。後述のとおり、伊賀良井の毛賀沢川への水落とし（はずし場）であったと考えられる。こうした類例は、三日市場大原遺跡・中川遺跡（飯田市教委 1996）等にみられる。

鈴岡城址二郭堀ハに設定された17トレーナンチ及び二郭9トレーナンチSD05（飯田市教委 2009）は中世城郭の防衛施設である。二郭堀ハは新旧2時期あり、二郭との比高差6.9m、法面の傾斜は25～35°程度を測る。SD05は幅2.3m深さ1.4m以上で、断面形はV字に近い2段落ちを呈する。断面逆三角形に近いタイ

ブで、他に、高森町古城城・松源寺平遺跡・新井遺跡・宮沢遺跡等でも調査されている。このうち松源寺平遺跡の溝は松岡城内に引かれた用水と考えられている。

こうした堀・溝の事例の中で、今次調査で調査された溝址1の断面形と類似するのは鈴岡城跡二郭の堀・溝址等中世城郭に関係するもので、今次調査の溝址1の機能については防衛施設ないし用水が考えられ、中世に位置づく可能性が高いと考えられる。

防衛施設としての機能を想定した場合、位置からみて溝址1は必ずしも下の原の台地を効果的に区切っているとはいえない。前述した埋土の状況から想定される搔掲げ土によるマウンドの存在を考慮しても、溝の幅は容易に跨ぎ越えることが可能である。仮に、マウンドが鈴岡城防衛のための施設としても、むしろ守るべき対象がある溝の南側に搔き掲げた方が効果的に防衛機能を果たせる。さらに、溝の両側に柵が、底面に逆茂木等が設置されたりした痕跡は確認できない。防衛施設である可能性は低いと考えられる。

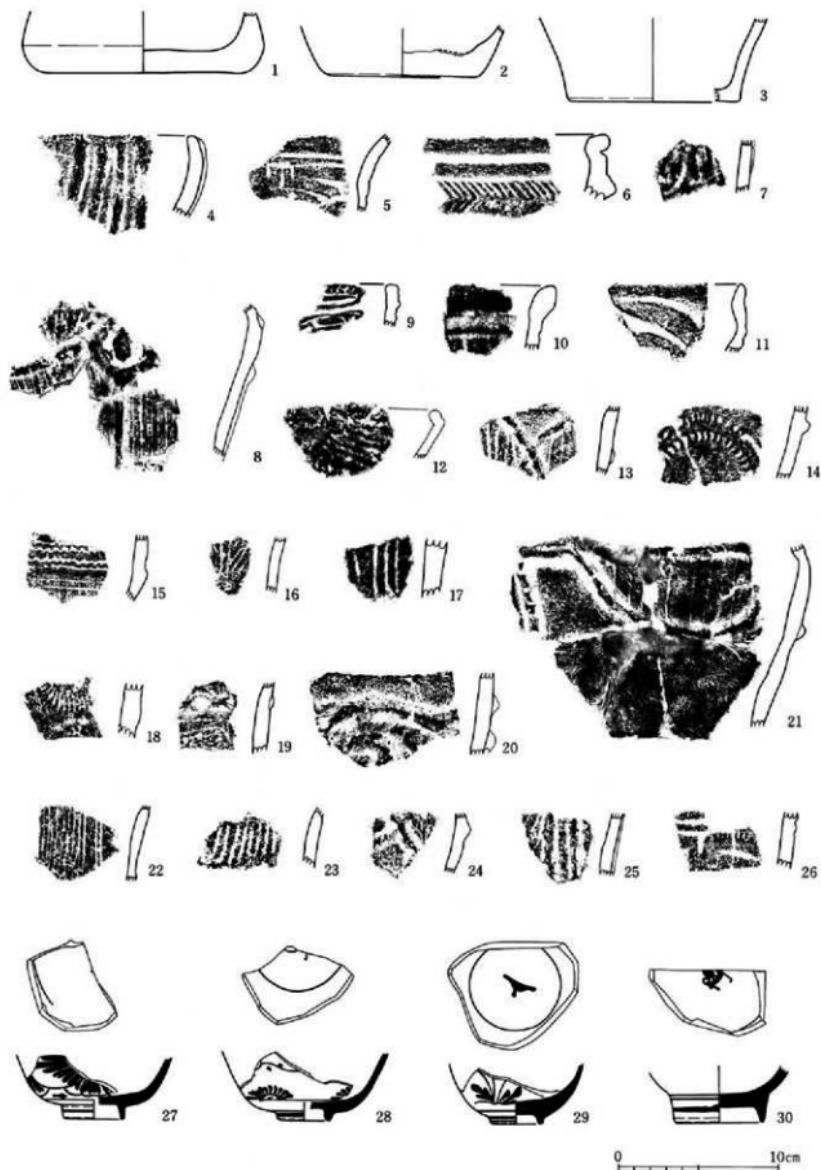
一方、用水である可能性は、溝址1が仮に開渠であったとすれば、溝の底面レベルは西端側が標高519.13m、中央部で標高519.17m、屈曲部で標高519.32m、東端側が標高519.30mで、本来低いはずの下流側が高く、用水としての機能を備えていない。また、底面の観察結果からは水が流れた痕跡は把握できなかった。前述のとおり、断面観察結果は溝の下半が一気に埋め戻されたことを示すが、開渠とすれば埋め戻しは不自然で、開削後月日を置かず計画変更され実用に供されなかつた可能性が考えられる。一方、下半の埋め戻しが鈴岡城への引水を目的として極あるいは管状の設備を埋設したことを示す可能性もあるが、そうした暗渠の痕跡も断面で確認できなかつた。

現段階では、用水について2つの可能性を指摘することとする。1つは、溝址1の主軸方向は、屈曲部より西側はN90° E、屈曲部より東側はN134° Eを測るが、溝址1屈曲部と鈴岡城主郭を結ぶ線もまたN135° Eを示すことから、鈴岡城への引水を企図して開削された可能性である。もう1つは、今次調査地点西側の伊賀良井の現河道方向はN93°～99° E、同じく調査地点南側の河道方向はN137°～148° Eで、溝址1の方向と近似することから、当初今次調査地点まで掘削し供用予定されていたものが、何らかの理由により約100m上流側で現河道に向きを変更した可能性である。

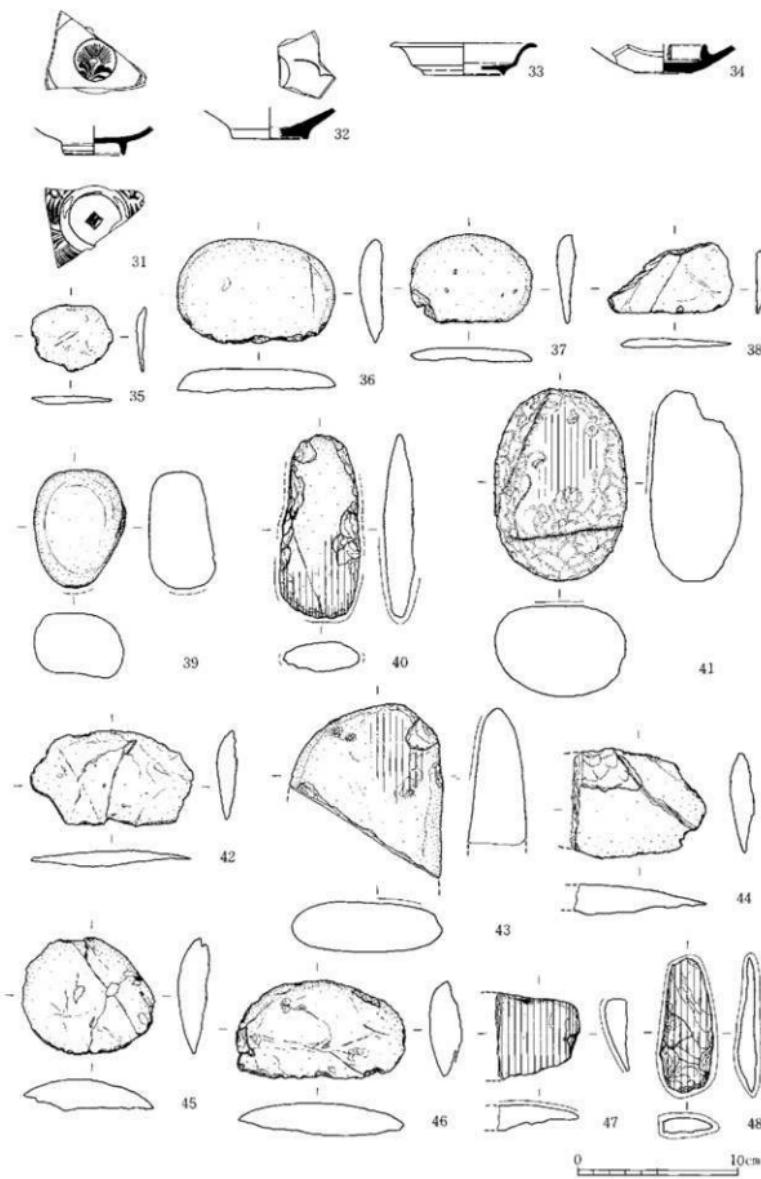
調査の成果は以上のとおりであり、開削時期について埋土上層から出土した近世磁器以外に時期を証するものではなく、形態の類似性から中世の遺構と推定するにとどまるが、溝址1の断面形や検出位置から伊賀良井ないし鈴岡城と密接にかかわる可能性が指摘される。伊賀良荘や伊賀良井、さらには小笠原氏とその営んだ城館群等々、当方の古代中世史の研究上、多岐にわたり関連することが考えられる。また、今次調査地点では断片的な遺構・遺物の把握にとどまったものの、隣接する民間開発調査地点を含めた縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落の追求は大きな課題であり、今次調査地点周辺でのさらなる文化財保護の取組みが求められている。

引用参考文献

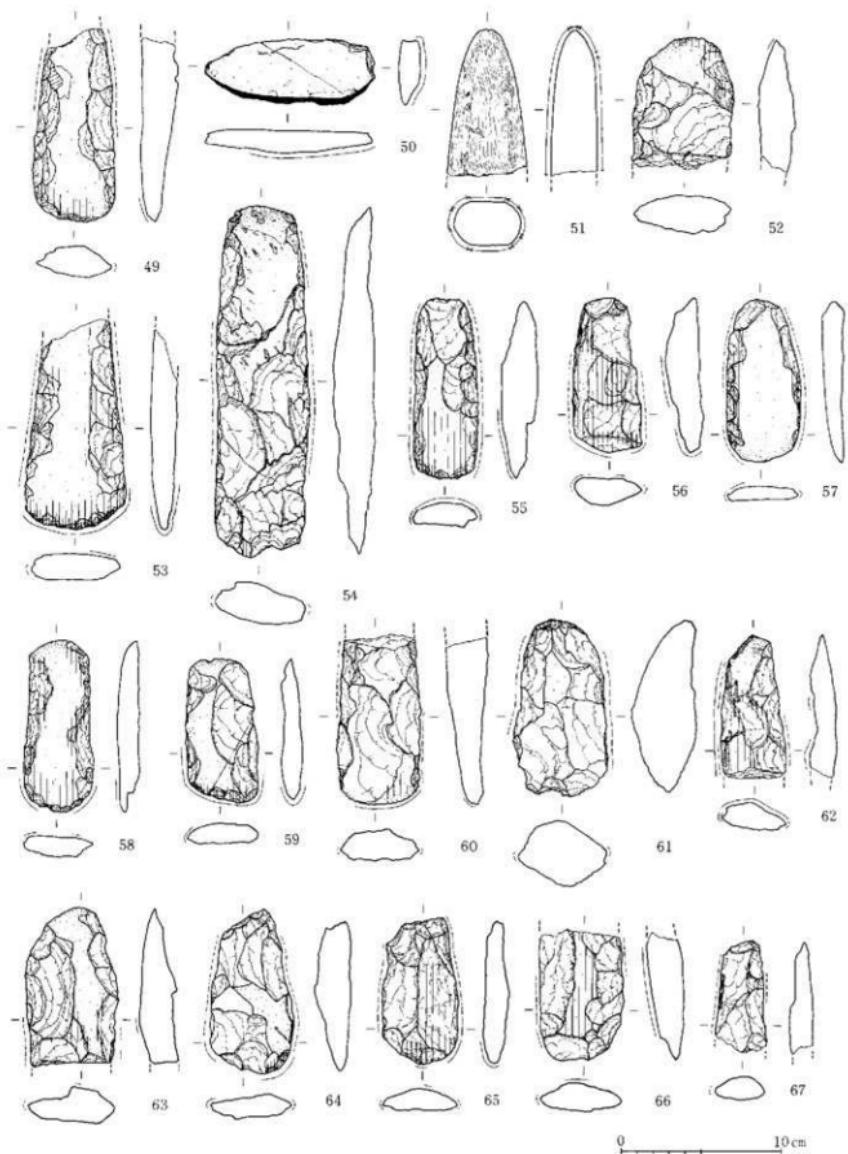
- 飯田市上郷考古博物館 2009 『南信州の山城』
- 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991 『恒川遺跡群新屋敷遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996 『中川遺跡・一つ塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2009 『鈴岡城址』
- 伊賀良村誌編纂委員会 1973 『伊賀良村史』
- 伊賀良を広める会 2010 『伊賀良の民俗(3) 伊賀良の地名』
- 佐藤全敏 2013・2014 「信濃国伊賀良荘光明寺と二つの經筒(上・下)」『信濃』65-12、66-2
- 下伊那誌編纂会 1961 『下伊那史』第4卷
- 下伊那誌編纂会 1967 『下伊那史』第5卷
- 下伊那誌編纂会 1970 『下伊那史』第6卷
- 竜丘史学会 2013 『旧竜丘村の小字—伊那谷南部の小字1—』
- 羽生俊郎 2013 「117 鈴岡城」『長野の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
- 福島紀子 1999 「第2章第2節第3項 天竜川水系の治水と用水」『長野県土地改良史 第1巻 歴史編』長野県土地改良史編集委員会
- 藤沢良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 村沢武夫 1981 『大井と奥山平太夫』



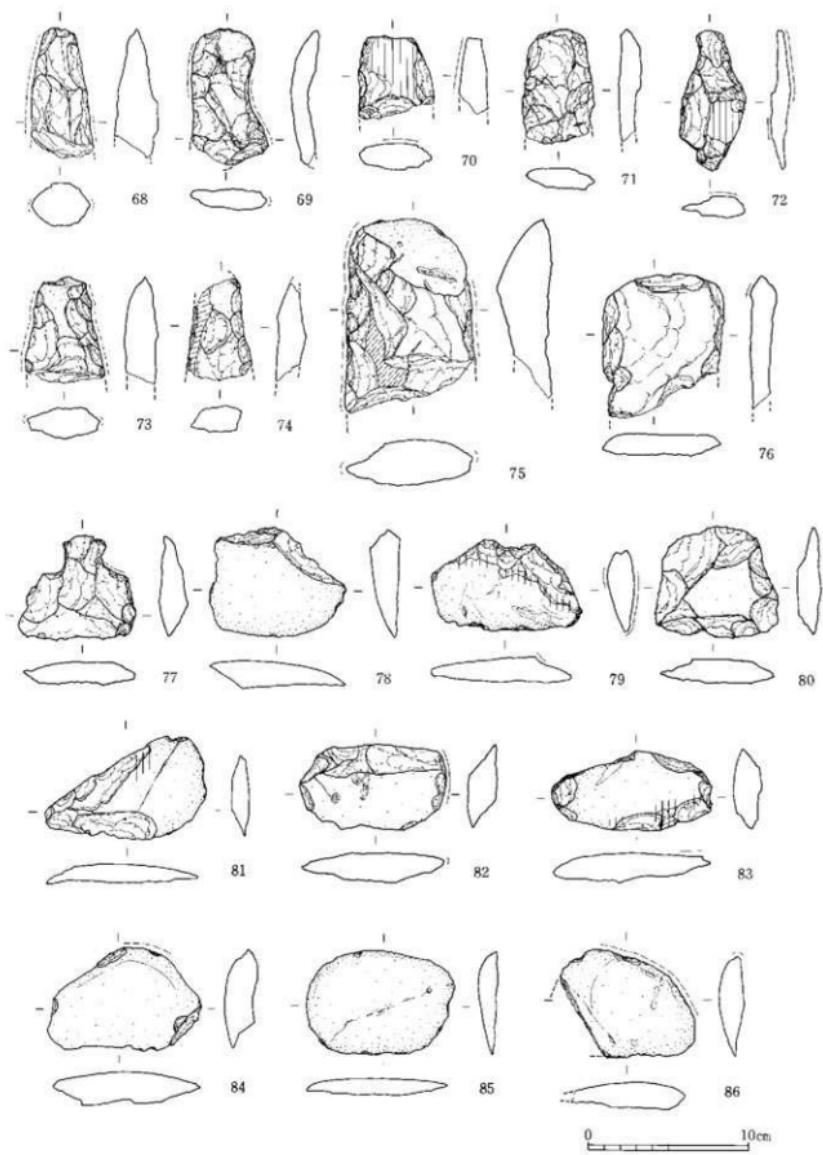
第1図 下の原A遺跡出土遺物（1）



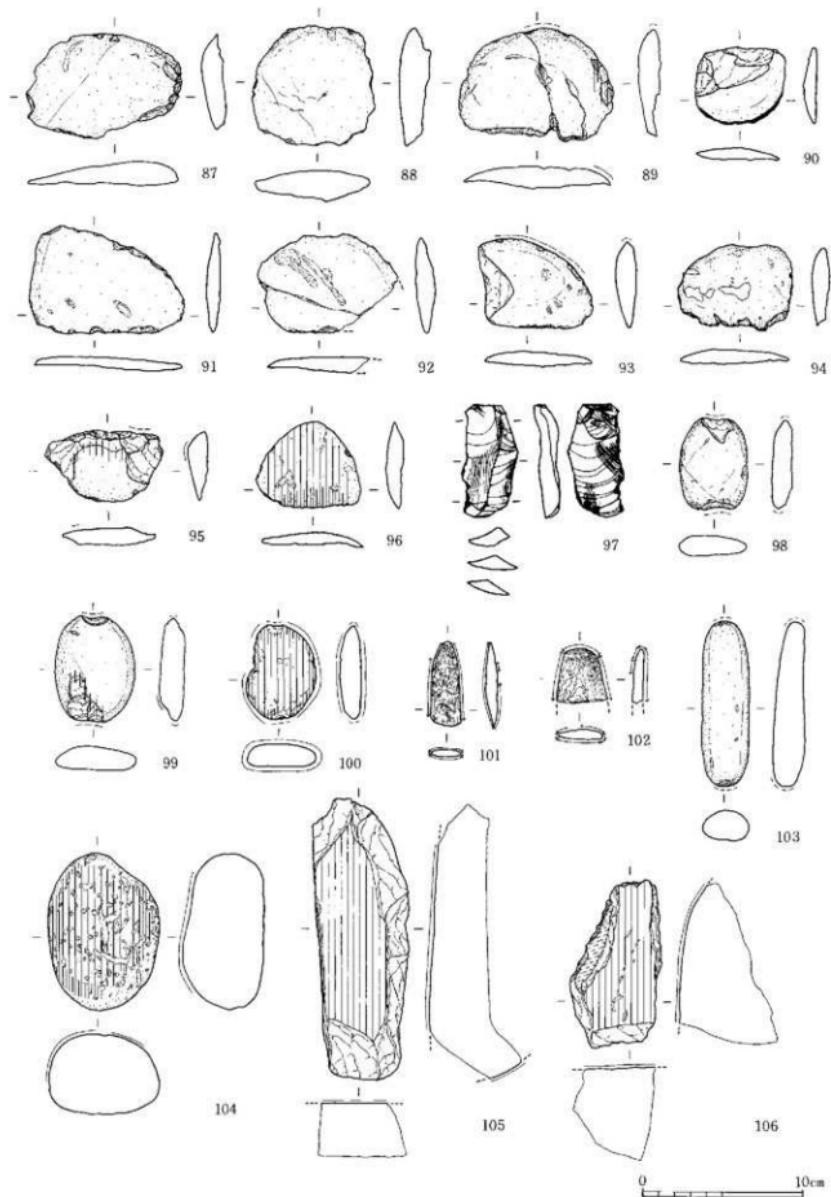
第2図 下の原A遺跡出土遺物（2）



第3図 下の原A遺跡出土遺物（3）



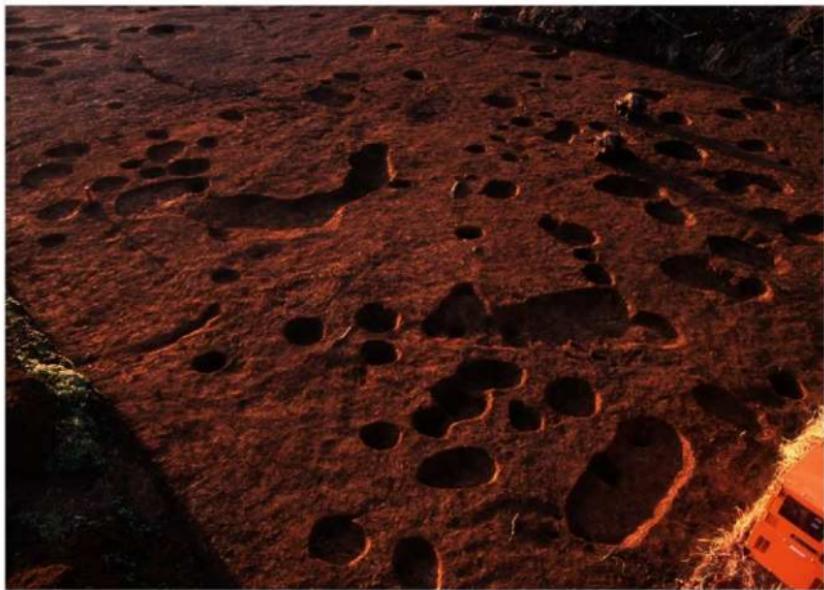
第4図 下の原A遺跡出土遺物（4）



第5図 下の原A遺跡出土遺物（5）



調査区全景



同 上



溝址 1（東側から）



溝址 1（西側から）



同 断面（上：西端、下：東端）



竪穴建物址41



発掘作業風景



出土遗物（1）



出土遺物（2）



出土遗物（3）



出土遺物（4）



出土遗物（5）

報告書抄録

ふりがな	しものはらAいせき						
書名	下の原A遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	馬場保之						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511						
発行年月日	令和3年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しものはら 下の原A いせき 遺跡	いいだししもとおか 飯田市下殿岡 463-1	20205	287	35° 29' 31"	137° 49' 01" ~ 1992.11.7 1992.12.19	1737m ²	民間開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下の原A 遺跡	集落跡	縄文時代 中期 中世 近世	竪穴建物址 土坑 溝址	縄文時代 土器 石器 近世磁器	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代中期中葉から後葉の集落の一端を調査した ・中世と推定される溝址1は伊賀良井ないし鈴岡小笠原氏の築造した鈴岡城との関連が想定される。 		
要約	<p>今次調査で特筆される遺構は溝址1である。今次調査地点の西側、溝址1延長線上には伊賀良井（大井）があり、調査地点付近で伊賀良井は東南東方向に流れを変えている。一方、鈴岡小笠原氏の居城鈴岡城は南東約1.2km（主郭までの距離）にある。</p> <p>伊賀良井は、中世には莊園領主の公文所がおかれた今次調査地点西方約600m付近まで延伸されていたものと考えられる。さらに、鈴岡城址の南側松ヶ崎の尾根を切断して「外堀」が設けられ、水を新川に落とされている。この外堀は鈴岡城の堀に比肩されるもので、鈴岡城の防御施設の一端を担う目的で開削された可能性がある。鈴岡城に拠った小笠原氏により中世のある時期までには伊賀良井が鈴岡城まで延伸されていたことを示すと考えられる。</p> <p>鈴岡小笠原氏の居城鈴岡城の水の手は、城内二の郭の井戸の他、毛賀沢川から取水された清水井が知られているが、小笠原氏により伊賀良井の大規模な改修が鈴岡城に引いたときになされたともいわれ、伊賀良井からの引水の可能性も考えられる。</p>						

要 約	<p>これまで飯田下伊那地方で調査された堀・溝跡の事例の中で、今次調査で調査された溝跡1の断面形と類似るのは、鈴岡城跡二郭の堀・溝跡等中世城郭に関係するもので、今次調査の溝跡1の機能については防護施設ないし用水が考えられ、中世に位置づく可能性が高いと考えられる。</p> <p>防護施設としての機能を想定した場合、台地を区切る位置にないこと、溝の埋土から想定されるマウンドの存在を考慮しても溝の幅は容易に跨ぎ越えることが可能など、溝両側への柵や底面に逆茂木等が設置された痕跡は確認できないことから、その可能性は低い。</p> <p>溝跡1は溝の底面レベルは本来低いはずの下流側が高く、また、底面には水が流れた痕跡はないことから、用水としての機能を備えていない。断面観察では溝の下半が一気に埋め戻されており、開削後月日を置かず計画変更され実用に供されなかつた可能性が考えられる。一方、下半の埋め戻しは鈴岡城への引水を目的として極あるいは管状の設備を埋設した可能性も示唆するが、そうした暗渠の痕跡は断面で確認できなかつた。</p> <p>溝跡1の主軸方向から、鈴岡城への引水を企図して開削された可能性がある。一方、今次調査地点西側の伊賀良井の現河道方向とも近似することから、当初今次調査地点まで掘削し供用予定されていた伊賀良井が、何らかの理由により約100m上流側で現河道に変更された可能性も指摘できよう。</p> <p>以上、溝跡1の断面形や検出位置から、伊賀良井ないし鈴岡城と密接にかかわる可能性を指摘した。</p>
--------	--

下の原 A 遺跡

2021年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
